

要旨

【目的】

ICU 看護師の終末期ケアにおける困難感と、価値・行動との関連を分析する。

【方法】

研究デザインは、横断的研究デザインである。82 施設の ICU に勤務する看護師のうち、研究協力に同意の得られた 529 名の看護師を対象とした。困難感の測定には、「ICU における終末期ケア困難感尺度」(“Difficulties Felt by ICU Nurses providing End-of-life care” 以下 DFINE) を、また、価値・行動の測定には「The Values of Intensive Care Nurses for End-of-Life」(INTEL-Value) および「The Behaviors of Intensive Care Nurses for End-of-Life」(INTEL-behavior)を日本語訳した後、使用した。これに加えて、属性データおよび、原因となる状況（個人的・環境的・対人関係的要因）を加えた質問紙を作成し、使用した。

統計学的分析は、各尺度の得点、属性データおよび原因となる状況について、基本統計量の算出を行った。その後、因子分析による各尺度の信頼性妥当性、各下位尺度間の相関（ピアソンの積率相関係数）の確認、属性データおよび原因となる状況と各下位尺度得点との関連を、一元配置分散分析あるいは対応のない t 検定を行い確認した（多重比較は Tukey の HSD 法を用いた）。DFINE の各下位尺度を従属変数、属性、原因となる状況、INTEL-Value、INTEL-Behavior の各下位尺度を独立変数として、重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。最後に、これらの分析結果をもとに、回答者の属性・原因となる状況と、困難感・価値と行動について、因果関係を検討するために共分散構造分析を行った。

【結果】

各下位尺度と、属性・原因となる状況について分析を行った結果、看護師の困難感は、価値・行動や原因となる状況に関連が認められた。これらの結果をもとに、共分散構造分析を行ったところ、看護師の価値・行動が困難感に影響を与え、また属性や原因となる状況には、価値・行動に影響を与えていることが示された。モデルの適合度は GFI=0.950、RMSEA=0.050 であった。標準化パス係数は $p<0.05$ で有意であった。

【結論】

ICU の看護師が終末期ケアにおいて感じる困難である『自分自身への困難感』および『周囲への困難感』は、『整った環境』、『経験を重ねる』、『コミュニケーション能力』に影響を受ける価値・行動である『終末期ケアへの積極的な態度』、『終末期ケアに伴ういらだち』から生起する。